

## 可能性の場

鬼頭, 英一

<https://doi.org/10.15017/2328741>

---

出版情報 : 哲學年報. 27, pp.133-153, 1968-03-25. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

# 可能性の場

鬼頭英一

## 1

あるかないかということが一定の場においていわれるように、可能であるかないかということも一定の場においていわれる。

先ずあるかないかが一定の場においていわれるということの意味を明らかにしよう。あるかないかとは、どこかにあるとかないとかいうことであって、そのおいてある「どこ」、すなわち場を含めなくては、あるとかないとかは、無意味である。もちろんこの場合、特定の対象が主題化されて、それがあるかないかがいわれるのであるが、その場合どの場においてあるかないかが問題とされているかが決まっているのでなければならぬ。Aという人がいるかいないかは、どこにということが決まっていなければ一義的には決まらぬであろう。この部屋にいるかいないかが問題であることもあり、この町にいるかいないかが問題であることもあり、現在世界のどこかにいるかいないかが問題であることもあり、今まで歴史上に存在していたか否かが問題であることもあろう。我々がこれを問題としていると

きには、その「どこ」をもはっきり決めた上で問題としていたのである。

しかしあるないが問題とせられる場は、今挙げたような現実の場ばかりではない。正十面体があるかないかは、数学的存在の場においていわれているのであるし、痛みの感じがあるかどうかは、私の感覚の場においていわれているのである。かくて存在の場には、同じ存在領域の広狭の別があるばかりでなく、存在領域そのものの種類の別もある。しかしいずれにせよ、あるとは、或る場においてあるということであり、ないとは、或る場においてないということである。

それでは、場そのものがあるとかないとはいわれないであろうか。ある対象がそこにおいてあるとかないとはいわれない場それ自身について、あるとかないとはいわれないであろうか。そもそも場が「ある」のでなければ、そこにおいて何かがあるとかないとはいえられないのではなからうか。

たしかに一定の場においてあるないがいわれるとき、その場の「ある」ことが前提となっている。しかしその場の中の対象があるといわれるのと同じ次元でいわれているのではない。その場のあるかないかは、その場の中で決めることではない。その場の中であるかないかを決めるとすれば、すでにその場の「ある」ことを予想しているからである。かくてその場そのものがあるかないかが問題とされうるとすれば、それとは別の場においてそれが問題とされるのでなければならぬ。人がこの部屋のうちにいるか否かが問題とされるように、部屋は、この町にあるかないかが問題とされるであらうし、この町があるかないかは、この国において問題とされるであらう。数学的存在の世界は、それ自身として存立するものであらうけれど、それがあるかないかを問題とするとすれば、たとえば我々の思想の世

界にそれが一つの位置を占めうるかどうかを問題とすることになり、やはり、そのおいてある場が予想せられることになるであろう。

ところであるか否かが問題になる場に、二通りの種類が区別されるであろう。一つは、数学的存在の領域や自然の領域などの如く、一応我々との関係を捨象して、それ自身 (an sich) として「ある」領域という意味での場である。したがってその領域においてあるか否かが問題とされる時も、それは、それ自身としてあるか否かが問題とされているのであって、我々にとつてあるか否かが問題とされているわけではない。これに対して、今一つは、我々の置かれてある境位としての場である。たとえば、我々の置かれてある経験の野とか、我々の置かれてある行為の場とかいうものである。したがってここでは、その境位においてある我々が捨象されてはいない。そこに何かがあるとかないとかいわれる場合、それは我々にとつてあるとかないとかいう意味をもつことになる。たとえば、この難病を癒してくれる名医がいるとは、単にそれ自身として存在するという意味ではなくて、我々の境位のうちに我々にとつて存在するということであり、そこへ行って診てもらふことができるという事態をあらわしているのである。

さらにこの第二の場合につき二つの場合を区別することができる。一つは、その置かれてある境位が、我々に共通主観的に与えられているものであって、そこにおいて何かがあるというときでも、それは共通主観的にある、私にとつただけでなく他の可能なる如何なる人にとつてもあるという意味をもつ。したがってそのものは、客観的にあるということもできる。しかしそれは、我々に共通な我々の境位のうちに客観的にあるということであつて、その境位を捨象してなおあるかどうかについては何もいわれていない。これが正常的な我々の置かれてある境位である。しかし

我々は、この境位に対し、ある種の態度変様を行なうと、「私」の置かれている境位といいうるような境位が現前する。そこでは、共通主観性への要求、客観性への要求が一先ず停止せられて、その境位に現われるすべては、現われているかぎりのものとして受け取られる。光ったような感じがあったというだけで、他の人にも見えるような客観的な光があったとは思わないのである。このような意味での現象の境位においては、このように見えているが、実際は、客観的にはどうかなどという問いは無意味なのである。だからこの境位は、「我々」の境位ではなく、私だけの境位であり、厳密には私という明確な意識すらない境位である。かくしてここに現われるものについては、あるかないかを問うことは無意味である。かく問うことは、あるように見えているけれど、本当にはあるかないかを問うことであり、共通主観的な境位に移行して考えていることになるからである。しかしかく現われているものは、ある意味で確かにあるものである。それは、現われていないもの、現われていたが、もう現われていないもの、いつか現われるにせよ、今は現われていないものなどが、ないものであるのに対してのあるものである。ただこれについて実はあるのかないのかを問うことは無意味である。それは、ある意味であることが不可疑的であるといってもよいが、それは、あるかないかを問うことが無意味なものとして現前しているということであって、客観的にあるという主張があり、その主張が不可疑的であるというのではない。

このような私の境位は、私がいなくなれば、消失するものと了解せられている。これに対して共通主観的な「我々」の境位は、私がいなくなっても、なお残るものと了解されている。我々の境位に共通主観的に「ある」ものは、私が死んで存在しなくなっても、あとにその境位に残るといふ意味であるといわれている。(もちろんその時は、「我々」

の性格が多少変様されるであろうし、またそのもの自身が滅して存在しなくなるということは別のこととしての話であるけれど。しかし私の境位に現前している「ある」ものは、私にとってあるものとして、私がいなければ、すなわちなくなるものとして了解されているのである。

この意味で私の境位にあるものは、通常の意味で、一定の場においてあるないがいわれるものとは区別される。ここでは、「ある」しかないのだから、あるないのいわれる場が別にあるわけではない。ここでは現われているものがあるだけで、それと境位とがわかれて与えられるのではない。まず境位があつて、その中にそれぞれの対象が与えられるのではなくて、全体が現われとして開示されているだけである。そのときそれが「私」の境位だとはつきりした意識もないのが通常であるが、現われを受けとめるものとしての何かは、Xとして了解せられ、それも現われと存否を共にするものとして了解せられている。

かようにあるかないかが問題とせられる場にも色々のものがあるが、第一の領域の意味での場は、我々がそれを構想または発見するような性質のもので、我々がある領域の問題を提起するときは、その場において考えなければならぬけれど、我々が如何なる問題を提起するときも、その場から離れることができぬというような性格のものではない。我々が日常的な課題の解決に努めているとき、必ずしも数学的存在の領域にかかわる必要はないのである。これに対して我々は、第二の、境位の意味での場からは、如何なる場合も脱却することができない。我々が数学的観方に立つときは、我々の直面する境位から眼を逸らしはするが、経験の境位がなくなるわけではない<sup>(1)</sup>。我々が生きており、実存し、思索しているかぎり、我々は常に境位においてある。「我々」の境位にあると共に私の境位にもある。

我々の観方のとり方で一方の境位が主題的となることはあるが、他方の境位も消失するわけではない。我々の眼前にある世界は、共通主観的、客観的にあるものとして了解されていると共に、私に現われている限りのもの、私がいなくなれば消失するであろうものとしても了解されている。

1 領域としての自然と我々のおいてある境位としての自然とは区別される、後者は、我々が常においてある場であるが、前者は、我々が後者に基づき理論構成することによってはじめて成立する場である。

## 2

我々は、あるかないかが問題とせられる場について考察した。現実的存在の野よりも、可能的存在の野の方がはるかに広いのが普通であるから、可能であるかないかには、一定の場においてというような制限がないかのようにも思われる。しかし一般的には、可能であるかないかということも一定の場においていわれるのであり、時には、一定の場に立ちつつ、その場を超えたものにつき可能性を云々することがあるというだけである。

我々が何かが可能であるかないかを問題とするとき、それが如何なる場においていわれているかを含意しているものでなければ、この問いは、一義的には答えられないであろう。我々が円い四角は可能なるか否かを問うとき、幾何学的領域という場においてこれを問うているのであり、カントによれば、純粹直観に提示され、構図されえないという意味で不可能なりとされるであろう。カントが物が実在的に可能 (real möglich) なるか否かを問うときは、我々の経験の野という場においてこれを問うているのである。我々の経験の野は、経験の形式的条件の表現である範疇によ

って構成されているものであるから、この野において見出される物は、経験の形式的条件に従っているものでなければならぬ。かくの如き物は、実在的に可能であるといわれる。かくて物が実在的に可能であるか否かは、我々の経験の野という場においてのみ問題となることである。そのことはまた、この経験の野を超えたところにおいては、この問題は無意味であること、そこでもなお可能性が認められることもあるが、それはどちらとも決めかねるという意味、問題的 (problematisch) という意味での可能性であって、実在的可能性の意味での可能性ではないことを含んでいる。

かくて可能であるかないかが問題とせられるのも一定の場においてのことで、時にその場を超えたものが前とは別の意味において可能であるといわれるのである。可能であるかないかが問題とせられる場に、領域としての場と我々のおいてある境位としての場とがあることも、あるかないかの場合と同様である。我々が我々の境位のうちに投企する可能性にも様々のものがありうるが、それが可能だと思いなされていただけでなく、誰も可能であることを認めなければならぬ状況にあるとすれば、それは共通主観的、客観的に可能であると了解せられていることになる。我々の共通主観的な境位においては、このような意味で可能であるかどうか問題となる。

ある物が実在的に可能であるか否かも、我々の境位において共通主観的な意味において可能であるか否かという意味で問われているのである。現実的なものは、我々の共通主観的な境位においては、この意味で可能的でもある。しかしこの意味で可能的なるもの、必ずしも現実的であるとは限らない。

また我々の現に経験しているものは、現実的であり、まだ経験していないもの、または、かつて経験したが今は現



前していないもの（…前の意味では現実的なもの）は可能であるということもある。これは、現実的でない意味で単に可能的であるが、全くの無ではなく可能的といわれるところにある程度積極的な意味で可能なのでもある。これは、経験可能なるもの、という意味での可能である。これに対するのは、経験不可能なものである。今は現前していないものに、経験可能なものと空想の産物の如く経験不可能なものがある。ここで可能であるかないかが問題とされる場合は、やはり経験の野という我々に共通な境位である。今経験している事物は、さきの意味で実在的に可能であり、今経験していないが、現実的に存在する物と同様であるが、これに対して今経験している事物は、今の意味では現に経験されているものであって、単に経験可能の状態にあるものではない。今可能かどうかが問題なのは、我々が現に経験している部分を除外しての我々の経験の野においてのことである。

ここでは、経験可能といっても、私にとって経験可能なのか、今共在している我々にとって経験可能なのか二通りの場合がある。私にとって現に経験されている圏と経験可能なる圏とがあり、これは「私の」経験境位をなすわけであるが、これは、さきに述べた、共通主観性への要求のない、私に現前する限りの境位とは区別されねばならない。この場合の「私の」経験境位は、共通主観性への要求を含むものである。私に経験可能であるか否かは、私にとってだけのことでなく、共通主観的に確認できるはずのことである。私に今経験されているか、経験可能の状態に留まっているかは、私に最もよくわかることではあるが、他人にもある程度確認できることであり、この区別は、私にそう現われているだけのものではなくて、共通主観的に確認されうるものである。

我々が現実に支配しているものの外に、支配可能なるかどうかが問題となる野があることも、前の場合と同様であ

る。我々が支配可能であるかどうかということも、共通主観性への要求を含んでいるものであって、我々が支配可能であると思ひこんでいるばかりではなくて、他の人にも我々が支配可能であることが検証できるような性格のものでなければならぬ。支配可能であるかどうか、我々の行為の行なわれる境位においてはじめて意味をもつものである。この場合にも、私が支配可能であるというときと我々が支配可能であるときとある。我々が支配可能なものというときも、我々が一人一人でも支配可能であつて、したがつてその総和としての我々も支配可能であるとき、我々一人一人は必ずしも支配可能とはいえないが、協力すれば支配可能というとき、我々のうちの誰かはできなくとも、他の誰かはできるものがあるが、漠然とした集団意識で、「我々」が支配可能であると思う（この病氣は癒せるといふが如き）ときなどがあるが、これらのどの場合についても、共通主観性への要求をもつて、可能なるか否かが問題となっている。これに対して私が支配可能であるときは、たとえば私が自分の手を自由に動かせるという場合のよゝうに、私自身に最もよくわかることなのだから、私の境位に現前するだけのことで、共通主観的、客観的に果してそのかを問ひうるようなものではないかに見える。しかし私が自己の手を自由に支配しているつもりでいても、それが錯覚で、実は動かしてはいないことが、他人の客観的な観察によつて明らかとなることがある。つまりここでも、共通主観的、客観的な意味で、支配可能性ということがいわれているのである。

我々は、今まで可能であるかないかが問題となる場について考察して来た。そしてこの場合も、領域としての境位としての場が区別された。境位としての場は、如何なる場合も決して消失してしまうことはない。しかし、あるかないかが問題となつていたときは、我々が共通主観的においてある境位のほかに、私が単独の実存としてある境位

が識別された。もつともここでは、あるかないかが客観的に問題とされることはなく、この境位に現われるものは、そのままあるものであって、あるかないかを共通主観的に問題とすることのできないものであった。そこに現われな  
いものが、すなわちないものであって、それが私に現われるか現われな  
いかで、どちらかが決まるだけである。つまりここでは、場の中に現われるものがすべてそのかぎりあるものであって、場の外のものがないものである。それでは、この境位において可能性がその場を占めうるであろうか。

## 3

我々は、我々の共通主観的な境位において様々の可能性を投企する。現在の場において我々が今経験している現実的な物のほかに、今経験してはいないが現実的にあるものであるから、経験可能なものが周辺にあるはずである。これらが経験可能なるものという意味での可能性として投企せられている。しかし現在の場においても、別の意味での可能性が投企せられることがある。たとえば、隣室に人がいるかも知れないという可能性が投企せられる。これは、現在のことであるから、現在の我々の境位において投企せられているわけであるが、隣室に人がいるかどうか確認していない状態であるために、人がいるかも知れぬという可能性が投企されているのである。これは、経験可能なものという意味での可能性とは区別されなければならない。これは、経験可能であることは決まっているので、経験されるかどうかか決まってい  
ないわけではない。今述べている可能性は、我々の認識能力が不十分であることから起る可能性である。しかしこれも、全く主観的なものではなく、かかる可能性が成立するかどうか共通主観的に確認できる性格の

ものである。

しかし我々が我々の境位に可能性を投企するといふときは、将来の可能性を将来に延びる我々の境位のうちに投企するのが普通である。将来我々の境位に起るであろう可能性、たとえば月との交通の可能性を我々が投企するのは、我々の将来の境位においてのことである。ただし将来の境位といつても、現在の境位から切り離されて、いつか我々が占めるであろう境位ということではなくて、将来へと延びている現在の境位より、将来のある時点における境位を展望していつているので、可能性は、そこに位置づけ、また時づけされることになるのである。我々が実現することによって決めている可能性についても同様である。しかしこれらは、我々が投企している通りの可能性であるかどうかを客観的、共通主観的に問題としうる可能性である。我々の境位に起るであろう可能性として投企されたものが、全く起るはずのないことが、その時点でも確認できることであるといふことも可能である。我々が実現することに決めている可能性についても同様のことがいえる。これらの可能性は、まだ現実的となっていない可能性であると共に、投企された通りの可能性ではないかも知れぬ、という可能性でもある。

ところで以上は、共通主観的な境位に我々が投企する場合の境位の可能性であった。前節の終りに問題となつたのは、私に現われるかぎりのものであり、私とその存否を共にする私の境位に可能性が認められるかといふことであつた。ここでは、私の境位に現われるものがあるもので、現われないものがないものであつた。そこでは、現われているものにつき、客観的にあるかどうかを問題にすることが無意味であつた。それでは、その境位のうちに、ないかも知れぬ可能性を投企することは不可能であることになる。私の眼前に現われているものは、現われているかぎりある

ものであって、実はないかも知れないと考えることが無意味である。故にないかも知れないという可能性をここに認めることも不可能であることになる。光ったような感じがしたという事実は、客観的、共通主観的に光があるかないかは別として、絶対にあることであり、そうでないかも知れぬという可能性を全く排除している。

ところで私の境位に現われるものは、ある幅をもった時間に現われるものである。しかも静止したもの、固定したものとして現われるのではなくて、次から次への現われへと移行しつつ現われているのである。今現われていたものは、直ちに消え失せ、どこからか新しい現われが来る。消え失せる先が、現在の視野であり、来る先が将来の視野である。私は、かく動く現われに直面しつつ、「今まで」と「これから」との二つの視野を意識している。かつて私に現われていたことは、「今まで」の視野のうちに投企され、これから私に現われるであろうことは、「これから」の視野のうちに投企される。私は、今現われているものだけに直面しているのではなくて、今までなんらかの現われに直面してきたこと、これからなんらかの現われに直面するであろうことをも意識しているのである。私は、あるものだけを見ているのではなくて、すでにないもの、まだないものを意識しているのであり、それらとの対比においてあるを実感しているのでもある。まだないものは、この場合、いつか現われるものとして、可能性として投企されているのである。これは、特定のものの現われのことではなく、現われ全体についていわれているのである。したがってまたこの可能性は、まだ現実的となっていないというだけの意味の可能性であって、実現されるとは決まっていないうい、という意味での可能性ではない。私の境位には次々と現われが続くはずで、現われがなくなるかも知れぬという可能性が投企されているのではない。このような「可能性」がそれにも拘らずあえて投企されることの意味については

後に問題とするが、さし当っては、これは問題とならない。私の境位にこれからの可能性があるということは、これを客観的、共通主観的に確認できるかどうか問題としうるような意味でいわれているのではない。かくて私の境位においても、これからの現われを可能性として投企するものである。しかしそれは、実現されないかも知れぬ可能性としてではない。

我々が共通主観的な境位に立つときも、これと同様な可能性を「これから」にもっていることは明らかである。我々は、共通主観的な境位において、他の何人とも共有しうる「客観的」世界に直面しているが、これも常に「これから」に連なっているものであり、我々は、これからの「客観的」世界を我々の可能的世界として展望しているのである。我々が実現されるかも知れない、または、実現すべく決められている可能性を投企するのは、この可能的な共通主観の世界においてのことである。私の境位るときは、共通主観的に確認できるような可能性をこれからの可能性のうち投企することはないが、我々の境位るときは、共通主観的に確認できるような可能性をこの可能的な共通主観的世界のうち投企することがある。しかしどちらの場合も、「これから」という意味での可能性をもつという点では共通である。

また私の境位には共通主観的に確認されるような可能性が投企されることはないといったが、共通主観的に確認されるような可能性を投企するという事実も、これを私の境位における一つの現われとのみ見れば、やはり私の境位に現われたこととして、そこから排除するわけにはいかない。私が枯尾花を幽霊と判断するとき、共通主観的な境位において、これを「客観的」な幽霊、他人もまた認めざるをえない幽霊と判断していることになるが、これを私がかく幽

霊と客観的に判断したこと、およびかく判断されたことそのことは、いわばフッセルのノエシス、ノエマ的現象として、共通主観的に定立されているのではない。前の判断は偽であるが、かく判断されたことそのことが現前していることは、共通主観的な意味での真偽以前の現象である。同様に私が何かを共通主観的に確認できる可能性として投企した場合にも、かく投企された〔共通主観的〕可能性は、共通主観的な境界においてしか位置づけられないが、かような可能性を投企したこと、および、投企されたかぎりの可能性そのことは、私の境界の現われにほかならない。私は、日常共通主観的境界に立っているから、いつも私の周囲にあるものは、共通主観的なものであると思っており、使用可能性のような可能性を投企するときも、共通主観的な可能性を投企しているのであり、常に私だけの思いなしで一般に通用しないことであるかも知れぬという危険に曝されているが、かく投企しつつあることは、共通主観的に問題とすることの意味がない、私の境界での現われであり、かく投企されたかぎりの可能性も、これをノエマ的なものと見れば、私の境界での現われにほかならない。投企された可能性は、存立しない可能性であるかも知れぬが、だからといって投企された可能性であることをやめることはないである。

このようにいわばノエマ的に変様された可能性は、私の境界にもその位置を占めうるが、共通主観的に確認されるような可能性はここにその位置を占めることができない。私の境界に属しうる可能性は、将来来らんとする境界としてのこれからの可能性で、これも共通主観的に確認できるかどうかの問題となるようなものではない。

我々は、可能性の場を追及して来た。我々がどうしても捨象することのできない可能性の境位として、我々の共通主観的な境位と私の単独的な境位とが挙げられた。我々が共通主観的に確認できる可能性を投企する場は、我々の共通主観的な境位であった。我々の共通主観的な境位が前もって開示されていなくては、このような可能性を投企することは不可能である。しかしそれと同時に私に現われているかぎりの境位、私がいなくなれば消え失せるような境位も、私がいやしくも何かを問題とするかぎり、捨象し切ることのできないものである。この二つの境位は、常に私の置かれている場であるが、いずれも「これから」があるかぎりにおいて、可能性を前にもっているということが出来る。しかしこれは、それがあつかないか客観的に確認しうるような性格のものでないことはいうまでもない。

たとえば私に可能性があるかないか客観的に確認できることもある。私が死病に罹っていて、あと三月もたないということがわかっているとき、私に、三か月以上に及ぶ可能性を想定することは誤りである。しかしこのような可能性、三月より以上生きられぬという可能性は、私の境位に属する可能性ではなくて、我々の共通主観的な境位に立って、私自身を眺めたとき、私に帰属させられる可能性であり、私に起る可能性ではあるが、共通主観的に確認できる可能性であり、時には私にはわかっているというところでもありうるのである。

このような見地に立つと、我々の共通主観的な境位は、私がそのうちに死んだり生きたりすることもできるような境位であることになる。私が死んでからの家の状態や人間関係を可能性として投企することができるのも、この共通



主観的な境位に立っているからである。「我々」の意識は、複数の人々がもつこともあるが、ここでは私が、私であると同時に懐きうる意識として了解せられている。しかも漠然とした「ひと」、世人というような意味ではなく、私が属している社会の一員という意味で「我々」といつているのである。したがって私を離れては「我々」の意識はないのであるが、「我々」の意識に立つとき、私がいなくなったときのことまで、「我々」の境位に起ることとして投企しうるのである。私は、私としては私の生きていくかぎりしか境位にあることなく、私と共に私の境位も消失するものと了解しているのであるが、「我々」として共通主観的に境位にあると考えるかぎり、私の死後もその境位は続くものと了解している。そしてその時他人の眼から私の死が客観的に眺められる事態をも可能性として投企しているのである。実際は「我々」のうちに私が含まれているというか、否むしろ「我々」というのは、私のありかたの一種態にすぎないのだから、私がいなくなれば、「我々」の意識も消失するに違いないのだけれど、「我々」という意識をもつときは、このように私を超えて生き延びうるかの如く、思っているのである。私が自己の死を考えるのは、通常この「我々」の境位において私の存在を客観的、共通主観的に眺めることによって可能となる。私が自己の死の可能性を考えるときも、これをこの境位のうちに投企する。したがって少くともそのかぎりでは、それによって「我々」の境位が止揚されることにはならない。私がいなくなっても、「我々」の境位は厳として存続するはずだからである。

しかし他方において私が自己の死に不安を感じるときには、共通主観的、客観的に、他人の眼の前で起る自己の死という現象に不安を感じるのではない。むしろ私の境位に籠もり、私も境位もすべてがいつかなくなる可能性を思っで、これに不安を感じるのではないか。確かに死んでからあとのことが心配だというのは、共通主観的な境位のこと

が心配なのであるが、死んだらどうなるかに不安を覚えるのは、私の境位の有限性に不安を感じているのであろう。

しかしさきに述べたように、私の境位は、常にこれからの可能性をもっている。私が意識をもっているかぎり、もうあとがないということではなく、常にこれからの意識している。もう息がとまるという意識も、これからの意識の極限の場合というだけであって、これからの意識でないとはいわれない。意識は、終ったという意識なくしては終らないともいわれるが、ともかく意識があるとは、これからの意識があるということである。それでは意識や自覚がなくなることとしての死の可能性は、どこまでもかたにあるもので、私の境位のうちに投企しうるようなものではない。私が私の可能性を投企しうるのは、私の境位において、あるいはむしろ、私の境位としてである。意識や自覚がなくなるということは、私の境位がなくなるということにはかならないから、そのような可能性を私の境位において、ないし私の境位として投企することは不可能なことである。私の死の可能性は、私の境位を止揚する可能性であるから、これを私の境位に投企することはできないのである。

それでは私は、常にこれからの意識をもつものであり、そのかぎり決して死の可能性に出会うものではない。死の可能性は決して私の可能性とはならぬものである。したがって、私は、自己の死、すなわち、私の自覚が無になることに不安を感じる必要がないというべきであろうか。エペキューロスの死不遭遇論は真理であって、死の不安は、無知より生ずる不安にすぎないのであろうか。しかし私が自覚を失うこととしての私の死に不安を感じていることは事実である。それが様々の理論や修行により緩められることがあるにしても、まさにそのことこそ死の不安があることの証拠になる。しかもこの死の不安は、我々の共通主観的な境位において投企された私の死の状態、死後の状態に対す

る不安とは別のものであって、これほど明確で疑いなく見える私の境位がいつか無に帰することに對する不安であり、共通主觀的境位以前に起りうる不安である。このような死の不安においては、ある可能性の投企が含まれている。しかもそれは、境位を止揚する可能性であつて、境位においては、または、境位としては投企されえない可能性である。可能性は、なんらかの場に投企されるものであると考えられて来たが、この可能性は、如何なる場において投企されるのであるか、その当の場を止揚する可能性がその場に投企されるとは、如何なることであるか。

私は、何を問う場合も私の境位を捨象することはできないのだから、私の境位が無に帰する可能性を問うときも、私の境位においてこれを問うているのである。これは、自らに帰つて自らを止揚する可能性というべきであろう。私の境位ということから出発すれば、これを止揚するような可能性をここに認めることはできなくなるし、私の境位を止揚するような可能性を先ず認めて考えれば、私の境位が揺がされることになる。私の自覚がなくなるということは、論理的に可能であるばかりでなく、また共通主觀的境位において可能であるばかりでない。私の自覚がなくなるといふことは、実感的にあるかも知れぬこととして感ぜられている。しかもこれを可能性として投企しようとして見ると、それを位置づけるべき境位が見出せなくなつて、ことを思い知る。かくの如き可能性は、投企せざるをえず、かつ、その投企が挫折せざるをえないという性格のものであり、一定の場に投企せられる可能性とは區別されなければならぬ。かくの如き可能性をもつことが、單独的実存の特色であるともいえよう。かくの如き可能性は、もはやそのうちにこれを投企すべき場をもたない。より厳密に言えば、私の境位のうちに投企しようとして、これが投企されることが私の境位を止揚することになることに気づき、その結果その投企されるべき場がないことに気づくというのが、真

実の事態であろう。

5

ところで今境位そのものを止揚する可能性のことを問題としていた。そしてその止揚される境位として、私が何かを問うかぎり捨象しえないはずの私の境位のことを考えていた。それでは同様に捨象しえないはずの我々の共通主観的境位については如何であろうか。これについても止揚する可能性を考えうるか。

先ず我々の共通主観的境位が捨象されない境位であることの意味を吟味しよう。我々がこの境位のうちに投企することについては、私がそう思っているだけなのか、他の何人もそれを認めうることなのかという問題が提起される。我々がこの境位のうちに投企する「客観的」可能性についても同様である。しかし我々においてある共通主観的な境位そのものは、これらの問題が提起されるために必然的に予想されなければならぬものであって、それ自身は私の思いなしで、我々がそこにおいてあると思ひこんでいるだけの境位なのか否かという問いを提起しよう。私ではない。それは、私にとって私の境位が捨象されえないものであるように、我々の境位も決して捨象されうるものではない。というのは、私があるとは、私の境位においてあるということであると同時に我々の共通主観的境位においてあるということだからである。ところで私があるとは、私の境位においてあるということとはわかるとしても、私があるということから、どうして直ちに我々の境位にあるということになるか。

それは、私という実存のほかに事実上他の実存が存在していて、それらの間に我々の共通主観的境位が事実上存立

しているということではない。私は常に私と同様な実存が可能であることを意識しているから、可能なる他の実存との間に「我々」という意識を懐きうる。これは、事実存在している多くの実存との間に成立する「我々」の意識でなく、かりに他の実存が事実に存在しない場合でもなおかつ懐きうる「我々」の意識である。したがって私は、「我々」という意識を懐きうるかぎり、我々の共通主観的境位に立つことができる。かくて私があるということから、直ちに我々の共通主観的境位にあるということになるわけである。

もちろん我々は、この共通主観的境位のうちに私自身や「我々」を投企して、これらを共通主観的なもの、客観的なものとして扱うこともできる。この共通主観的客観的世界のうちに私という一人の人間が生まれ、生きながらえ、いつかこの世界から去るものと考えることができるよう、我々という複数人間がこの世界に存在し、次々にこの世界を去って行くものと考えられることもできる。これらの投企は、誤まりのありうることで、私だけの思いなしにすぎないこともあるのである。しかしこの場合の私や「我々」は、どうしても捨象し切れない私の境位や我々の境位という場合の私や「我々」とは区別されるべきである。

ところで私が自覚が無になるという意味での可能性を投企するときは、その可能性の投企さるべき場たる私の境位が止揚されてしまうことになるが、我々の共通主観的境位は、止揚されないように見える。たしかに私がいなくなってもなお他人が残るうると考えるのが我々の共通主観的境位の意味である。私は、ある短かい期間しか余生はないが、「我々」としてはさらに先まで存在しうるかの如く考える。しかし「我々」の意識が、私が自己と同様なありかたをもつものとの可能なる共存の意識をもつことよって成立するだけのものであるとすれば、私がなくなれば、我々も

なくなる、私の意識がなくなれば我々の意識もなくなるはずである。したがって私が無に帰するということは、私の境位の止揚であると共に、我々の境位の止揚でもある。しかし客観的に考えられたものとしての私（特定の歴史的個人としての）や「我々」は、我々の共通主観的境位のうちに投企されるものであり、この境位において、この意味での私がいなくなると、「我々」が私を除いた「我々」として残存するように考えられるのである。私がいなくなるということにも、私の境位の私がなくなることと我々の共通主観的境位のうちに客観的な私として投企されているものがなくなることとの区別がある。後者がなくなっても、共通主観的境位が止揚されることはない。むしろ後者がなくなるとは、共通主観的境位に立つてこそいいうることなのである。同様に我々が残るとか残らぬとかいいうことにも、二義がある。私がいなくなれば、我々の境位もなくなるとか我々も残らぬといふことは、私の可能なる共存の意識として、私の意識に常に伴っている我々の意識という意味においてのことであって、我々の共通主観的境位のうちに「客観的」な我々として投企されるものの意味であれば、私が客観的な意味でいなくなっても、なお我々は残るといいうるのである。

(一九六七・一〇・三二)